AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

看護研究集録 (2017.9) 平成28年度:7-8.

短期入院で手術する子どもの看護に関する外来看護師2名の認識

伊藤 麻美, 森 浩美, 佐々木 俊子, 岡田 洋子

短期入院で手術する子どもの看護に関する外来看護師２名の認識

○伊藤麻美[1]　森浩美[2]　佐々木俊子[3]　岡田洋子[4]
[1]旭川医科大学病院、[2]旭川医科大学医学部看護学科
[3]名寄市立大学保健医療学部看護学科、[4]日本医療大学保健医療学部看護学科

【目的】

近年、短期入院で手術する子どもは増え、外来看護師が担う役割は大きい。本研究の目的は、短期入院で手術する子どもの入院前と退院後を看る外来看護師の認識を明らかにすることである。

【研究方法】

用語の定義：「短期入院」とは概ね1週間前後の入院期間とする。

対象：短期入院で手術する子ども（以下、子ども）が入院前と退院後に通院する外科系外来の看護師である。

データ収集期間：2015年7～9月

データ収集方法：自作の面接ガイドを用いた半構成面接である。面接は一人一回60分程度とし、プライバシーが確保できる部屋で研究者と対象者の一対一で行った。主な面接内容は、外来で担当する子どもと親の言動や反応、子どもと親への看護として大事に思い実践していること、子どもと親への看護として困難を感じていること、子どもと親が入院する病棟看護師への意見、連携・協働のあり方などとし、対象者の許可を得て録音した。

分析方法：面接内容の逐語録を作成し、繰り返し読み込み、意味・内容が損なわれないように１記述単位ごとに単文化した。さらに、単文の意味・内容ごとにコード化した。次にコードの共通性と類似性、差異について比較検討し、再編を繰り返して、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。分析の全過程において小児看護学教員2名と臨床看護師2名で検討し、分析・結果の妥当性の確保に努めた。

倫理的配慮：本研究は研究者が所属する大学の倫理委員会と病院看護師長の承認を得て実施した。対象者に研究の目的と方法、参加への自由性、途中辞退も可能、データは本研究のみに使用、面接内容は看護師長や同僚看護師、通院する子どもや親などに口外しない、研究成果の学会等での発表などについて文章と口頭で説明し、同意を得た。

【結果】

対象者の概要：対象者は50歳台の女性看護師2名、看護師経験年数は平均28年であった。面接の所要時間は平均54分である。

分析結果：看護師の認識は総単文数140から32コード、11サブカテゴリー、4カテゴリーが抽出された。以下、カテゴリーを【　】、サブカテゴリーを〔　〕、コードを〈　〉で記載する。

【短期入院で手術する親子との親密性の違い】は、〔多様な子どもが受診する多忙な外来〕〔子どもと親の自分たちを知る病棟看護師への親しみ〕から抽出された。看護師は〈受診患者が多く手術する子どもに十分時間を掛けられない〉外来看護師とは違い、〈子どもと親は自分たちを知る病棟看護師に会い嬉しそうにしている〉ため、子どもと親を看護する者同士であっても、子どもと親にとっては親しさに違いがあると感じていた。

【手術する子どもと親が前に進める説明のあり方】は、〔手術する子どもが分かるような説明〕〔親が納得できるような説明〕から抽出された。看護師は子どもには〈子ども本人に分かりやすく説明する〉などとし、親には〈親が納得できるように処置する理由を説明する〉〈退院後にも続くと予測される症状は予め伝えておく〉とし、手術する子どもと親の両方に対する説明の重要性を理解し実践していた。

【手術する子どもと親の心身の安全を守る】は、〔処置を怖がる子どもへの対処〕〔手術する子どもの親に対する配慮〕〔子どもの安全を最優先にする処置〕から抽出された。看護師は〈恐怖心が強い子どもは診察室での時間を最短にする〉〈疑問には時間が経っても応じると母親に伝え不安を解消する〉〈処置では子どもの安全を最優先にする〉とし、受診した際は子どもと親の心身の安全を守る配慮をしていた。

【入院手術が順調にいくための子どもへの支援】は、〔子どもの入院手術を乗り越える親としての力〕〔子どもの手術をする医師の役割・

責任〕〔手術する子どもを担当する病棟看護師との連携のあり方〕〔手術する子どもの入院前後を抜かりないように準備する〕から抽出された。看護師は〈手術する子どものために頑張ろうと家族も力を合わせる〉〈小児科と外科の医師が話し合い子どもの治療方針を決定する〉〈子どもと親に関する情報は看護サマリを読んで理解する〉〈退院後に備え病棟の患者カンファレンスに参加する〉とし、子どもの入院前から入院後、そして退院後へと一連の過程が順調にいくための看護師や医師、親の役割・行動を明確にし、看護実践していた。

【考察】

看護師は【短期入院で手術する親子との親密性の違い】を挙げ、病棟看護師と比較すると、親子と関わる時間が短いと感じていた。しかし、限られた時間の中でも【手術する子どもと親が前に進める説明のあり方】に配慮し、【手術する子どもと親の心身の安全を守る】ような関わりを持っていた。これは、親子が前向きに治療に望むことができるような支援として重要な看護であったと考える。

また、【入院手術が順調にいくための子どもへの支援】として、〔手術する子どもを担当する病棟看護師との連携のあり方〕についても挙げ、〈退院後に備え病棟の患者カンファレンスに参加する〉など退院後の看護が実践できるように病棟との連携を図っていた。

以上のことから、短期入院で手術する子どもの看護では、手術前の外来受診時だけではなく、退院後も親子にとって継続したより良い看護ができるよう、病棟との連携を模索しながら看護をすることの重要性が示唆された。